
屋上部は探偵団

ヒッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋上部は探偵団

【Nコード】

N1928S

【作者名】

ヒッピー

【あらすじ】

高校に入学して三週間、そこそこまあまあの学生生活を送っていた僕。しかしランチタイムはいつも一人ぼっちで惨めな思いに。だから、人がいない落ち着ける場所を求め彷徨っていた、そしてやっと辿り着いた先は身近な未知の空間ともいえる場所だった。そして勇気をもってその未知の空間に足を踏み込んだが為に変わった部活の変わった先輩達に出会い、そしてその先輩たちに出会ったが為に平凡な僕の日常は一瞬にして波乱万丈と化してしまった！！
好奇心と正義感で小さいトラブルから大きいトラブルまで万事解決

の為に僕は先輩たちと駆け回るはめに!?

未知への遭遇

廊下に響き渡る笑い声に足音、昼休みの学校に静けさを求めるのは政治家の汚職をやめさせるのと同じくらい困難だろくに。

昼休みのランチタイムは多くの学生にとって楽しみの一つなんだろうが、僕には最も淋しく惨めな時間に過ぎない。

昼食はいつも一人。

でも、友達ができてない訳じゃない、それどころか入学式翌日に三人もできたのだから、むしろ上出来な方だ。・・・多分。

けど、その友達たちは昼休みになると皆それぞれの部活の部室で先輩や仲間たちと一緒にランチタイムを過ごしている。

中学の時の友達はこの学校に通ってる人数自体が少なく、その数少ない中学の友達も他の新しい友達とランチで僕の入る隙間などない。だから部活に入っていない僕は一人淋しく教室の片隅で弁当を頬張る日々。

そんな淋しい日々を過ごしてはや三週間・・・教室の片隅で身を縮めて周りの人たちの会話を耳にするのも辛く感じてきた今日この頃、何処か自分の落ち着ける居場所を求め行く当てもなくまだ少ししか理解出来ていない校舎を呆然と歩いていた。

しかし何処にも人は居た。

昼休みが始まって五分程しか経っていないのにあり得ない程の時間が経ち、あり得ない程の距離を歩いた気がした。

「人多すぎ」思わず嘆いてしまう。

そうして歩いて行くと学習棟の秘境である生物資料室に辿り着くもそこにも人はいた。仕方なく教室に戻ろうかと思つた瞬間、ふと階段が目に入った。「こんな所に階段あつたっけ？」

不思議に思いつつも何故かこの階段に心が魅かれ足が勝手に階段を登った。

登るとそこは壁も天井も一面が寂しい灰色のコンクリートに囲まれて、ドアが壁に埋め込まれるように付いている空間があった。ドアの少し上には白いプラスチックのプレートが付いている。何やら文字が書いてある。

「屋上？」

屋上が珍しい訳じゃない、小、中学校にも屋上はあった。しかしどちらも基本は立ち入り禁止でおまけに鍵もかかっている事はずなかつた。その為屋上は僕にとって身近な未知の世界となっていた。

そしていつの間にか僕の足はその未知の世界に足を進め、ドアノブに手をかけていた。どうせ鍵がかかっていると思いつつもノブをひねるとドアはびっくりするくらい簡単に開いた。

「あれ!？」自分で開けたくせにこんなにも簡単に開いたことに驚いた。

ドアを開けるとスツ〜と心地よい風が体全体を通り抜けた。

さっぶけい殺風景。それが屋上への第一印象だ。

よくドラマや漫画なんかに出でくるような特に何の塗装もない一面のコンクリートの床にそこそこの高さのフェンスが周りを囲んでいる。あとはプールサイドなんかによくありそうなプラスチックの低めの青いベンチが二つ置いてあるだけだ。

穏やかだ、それが何よりも嬉しかった。

ベンチに座り弁当をひろげる。吹く春の風と静けさが弁当をよりおいしく感じさせた。高校へ入学して初めてランチタイムが有意義に感じた。

そんな余韻に浸っていると後ろのドアが開く音がした。

未知での遭遇

後ろのドアが開く音がして、背筋が一瞬にして凍りついた。誰だろう？先生かそれとも先輩か？どちらにしてもまずい。怒られる事はまず間違いはない。

先生ならまだいいが、先輩となると今どころか今後の学生生活すら危うい。

だいたいあまり活動的でない自分ですら屋上に入れることを見つけれられたのなら他の生徒が見つけてない筈がない。

もしかしたらヤンキー達の溜り場なのかも。もうありとあらゆるネガティブ思考が頭の中を巡る。

そうして考えてる内に自分の体の前に日影ができています。

真後ろまで人が来ている。影だけなら一人のようだが、確認したくても怖くて後ろを向けない。

「おいお前、聞こえてんのか？」

「は、はい。すいません。今すぐ出て行きます。」慌ててベンチの上の食べかけの弁当を片付けて、帰ろうとしたその時、腕がぎゅっと掴まれた。

「おい！ちよつと落ち着いて人の話聞けよ」

「すいません、すいません」

「だ・か・ら、聞けちゅうの。誰も怒ってねえから」

「えっ？」聞き間違いか？「今なんて？」

「だから、怒ってねえから落ち着いて人の話を聞けちゅうに」

ひとまず落ち着いてベンチに座る。

さっきまでの穏やかな空気があったという間に気まずい空気が変わ

った。

声の主は短髪に細い眉でちょっと強面こわもてだがその目元はどこことなく怖さを和らげた。この学校はスリッパの色で学年がわかるがこの人は赤色。三年生か。

「あ、あの取り乱してすいません、今すぐ出て行くんで」

「お前ホントに出て行きたいのか？」ベンチに仰向けになってアンパンを頬張りながら尋ねられた。

「あっ・・・その・・・」気持ち的には居たいと居たくないが6：4ぐらいだ。

この気まずい空気が辛くてここから逃げたい、しかしここから逃げるとまたあの辛く惨めな思いに逆戻りだ。別の意味で辛い。

「お前本当は居たいんだろ？だったら居りゃいい。」

「えっ！」その言葉は僕の心をスツと楽にしてくれた。

「いいん・・・ですか・・・？」聞こえているかどうかもわからない声で尋ねた。

「あっ！別にかまやしねーよ。自殺でもするわけじゃねーんだろ？」素っ気なく言うもその言葉には優しさがあるように思えた。

少しの間何も言わず下を向いて黙ってしまった。

「おい、まさかマジで自殺する気だったのか！？だったら出てつてもらうぜ」と起き上がり驚きを全く隠してない表情で聞いてきた。

「あっ・・・いえ、そんなこと・・・」と首を横に振った。確かに辛いとは感じてる学校生活だが辛いのは昼休みだけだし、まして自殺なんてとんでもない。

「ただ、昼休みはいつも一人で・・・、それで落ち着ける場所が欲しくて。」

「なんだ、なら居りゃいい」とあっさり受け入れてくれ、また仰向けに寝つころがった。

それからしばらくの間何をしてもなくボツと空を眺めていた。するとまたしても後ろのドアが開く。

「おう、遅いぞお前ら？」三年生は体を起こして言う。

新たな人物の登場に和らぎかけた気持ちと感じてた空気はまたも重くなった。

「遅いってまだ昼休み始まって十五分足らずですよ」と後ろで声がある。その言葉にあれだけ長く感じていた時間はまだそれだけしか経っていないかったのかということに驚いた。

恐る恐る後ろを振り返ると驚きの人物がいた。

そこには生徒が二人。

一人は先ほどの声の主であろう男子生徒だ。寝癖が火山の噴火のようにぐちゃぐちゃで酷い為、第一印象はかなりの衝撃を与えた。

あっさりとした顔はあまり何事にも興味を占めなさそうなイメージを持たせたが、それでいて少し幼さが残ったような顔なので愛くるしさも感じ取れる。

カッターシャツだけでとてもラフな格好をしている。手には文庫本とカフェオレ。スリッパの色は青ので二年生だ。

ちなみに僕は一年は緑色。

だが僕が驚いたのは彼ではなくその横に居た人物。彼女はおそらく学校一の有名人ではないだろうか？学校内の人間関係に疎い僕でさえ知っているのだから。

才色兼備で財閥のご令嬢、教師からも生徒からも信頼があり、男子女子問わず憧れの的である現生徒会会長である三年生の城崎しろうさき 撫な 樹那ずな先輩だ！

「皆あなた程暇じゃないのよ」とおっとりした口調で言う。

「へっ、うるせーほっとけ！」と言って三年生はふて腐れた様子でまた寝っ転がる。

「ところで彼は？」と突如自分に注目が集まった事に体が機能を停止した。

「ん？ああそいつはさまよう子羊だ」と訳のわからない名称を与えられた。

「はっ??何すかそれ?」と二年生がツツコム。

「特に意味はねえよ。そういえばお前なんて名前なんだ?」

今更!

「おい、聞いてんのか?」

「あつ、すみません」ここは言うべきなのだろうか?なんか受け入れてもらったばいし……。

「おーい、お前ー」

ここはひとつ勇気を出して「申し遅れてすみません。僕は一年A組の藤です。藤 和也と申します」

「じゃあ和也君ね。私は三年B組で生徒会長の城崎 撫樹那よ、よろしくね」と城崎先輩が優しく微笑んでくれた。

「こちらこそよろしくお願ひします」随分腰が低くなってしまった。「で、さつきからベンチで寝そべっている彼が私と同じクラスの小野 心一よ。見た目は怖そうだけどあれで本当はとってもいい人だから」

「怖そうわ余計だ」

「よろしくお願ひします」と寝そべってる背中というと、腕を上げて手を振ってくれた。

「で、あそこで本を読んでいるのが」と言いフェンスの方を指すので向くと、いつの間にかさっきの二年生がフェンスの前で文庫本片手にカフェオレを飲んでいる。

「二年生の港君よ」

「よろしく」と微笑みかけてくれた。

「こちらこそお願ひします」と会釈する。

そしてと言い城崎先輩が辺りを見渡す。「あら?今日、明日香^{あすか}ちゃんは?」。

「あー、あいつなら今日は剣道部の練習ですよ」と港先輩が答える。

「あら、そつなの」

その明日香さんって誰ですかと聞こうとした瞬間、昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

「あら！もう戻らないと」

「もうですか！？やれやれ」と言っつて港先輩も城崎先輩もそれぞれの荷物を片付け始めた。

「ほら、心一も早く。次の授業の準備しないと」と城崎先輩が促すうながが小野先輩は一向に動こうとしない。

「次の授業はなんだ？」

「古典よ」

「行く気失せた」と言っつて寝返りをうつ。

「行く気失せたって、ほとんど全ての授業に行く気なくせに」と港先輩がからかう様に言う。

そうこうしてる内に時間はどんどん過ぎていく。

「もう、先行くわよ」

「お先に失礼します」

そう言っつて二人は出口に向ったので僕も片付けた弁当を持ち、出口に向かう。

「今日はなんか・・・その・・・ありがとうございました。失礼します」と小野先輩に一礼してこの未知の空間を後にした。

屋上から出ると「和也君、明日も来るでしょ？」と城崎先輩が笑顔を向けた。

「えっ・・・？いや・・・？」

「遠慮することはねえぜ」と港先輩が気さくな笑顔で軽く肩に手を置いてくれた。

「はい」心がすごく晴れ晴れとした気持ちになった。

そして確信はないが、あの昼休みの孤独と惨めさから解放されそうな気がして、とても安らいだきがした。

明日もまた来よう・・・かな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928s/>

屋上部は探偵団

2011年10月8日18時44分発行